

## 銭湯にて

湯上りの子供たちの肌は、誰彼の区別なく平等に美しく見える。文句なしに上等である。しかし、ひとたび彼らがそれぞれの着物カゴの前に立ち、一枚一枚と自分の衣服を身につけはじめると、裸の子供たちが匂わしていたあの平等の美しさ、文句なしの上等な愛らしさが、かなしくも消え果てていく。

扉を開けて銭湯から出ていくとき、彼らは魚屋の子であり、八百屋の子であり、教師の子であり、百姓の子であり、失業者の子である。両親のある子であり、片親しかいない子であり、両親さえいない子である。北海道を見た子もあれば、海を見たことのない子もいる。満ち足りた子。いつも不足している子。すでにあきらめ顔の子。彼らが自分の着物を着終ったとき、社会は彼らをそれぞれの整理箱に区分けして、押し込んでしまふのだ。

(一九五六・五)